



## この研究が教えてくれたもの

評価専門委員 金城学院大学 教授 川瀬 正裕

研究の成果としては、両校ともそれぞれの条件の中で期待以上の成果を上げられたと思いますが、私は鬼崎南小学校へ定期的におじゃまをして、進捗状況などを教えていただきながらやってきました。

そこで、鬼崎南小学校の経過をふり返りながら、この研究の意義について確認していこうと思います。

まず、この事業の意味を考えると、いくつかの課題が考えられます。リソース・ルームの活用というこの研究では、①通常の学級の中で学習などに困難を示す児童の有能感をどのように形成し維持するのか、②教授法および教材、環境設定などはどのようなものが望ましいのか、③特別支援教育の意義を児童本人や保護者にどのように理解してもらうのか、④校内の連携や時間割の作成などをどのように工夫できるのか、などが挙げられます。この中で②については人事交流の成果に加えて、担当者の自主的な研修などが陰でなされていて、それ以上私が申し上げることはありません。したがって、それ以外のところを中心に触れさせていただきます。

初年度は、これらの課題にどこから切り込むのかを探る苦しいスタートでした。その中で、新しい試みをしていくエネルギーを結集することは大変なことです。「とにかくやってみよう」という覚悟の上で開始したことから動き出したことは明らかです。

2年目には人事交流などが行われ、かかわるスタッフがそろいました。この年度の活動が研究の主な部分となっていて、ほぼ完成された姿になっていきます。ここで、繰り返しになりますが、前年度の試行錯誤があつてこそ、関係の先生方の課題意識が共有されて、成果を上げる根底となったことを指摘しておきたいと思います。先生方がお互いに悩みながら手探りで進んできたことが、同じ方向と同じ意識を持つ形を形成したといえるでしょう。

そして、とても重要なターニング・ポイントは、全校の保護者の方に「チャレンジルーム」としてそのねらいや効果について紹介したことです。そのことから、リソースを利用する児童の保護者も肯定的に見守ることができたのです。家庭が肯定的に見守ってくれることは、何にもまして児童の自尊感情を支えることになったと考えられます。児童が楽しそうにリソース・ルームへ通い、有能感をふくらませていく姿は、周囲の児童にも肯定的に映ることになったと思われると思います。もちろん保護者や児童が学校を信頼してくれた背景には、児童の利益を最優先して取り組んでいただいたことが保護者にも、児童にも伝わったと推測できます。

また、校内連携に関しては、形式にこだわらずショート・ミーティングという非常に現実的な体制を工夫していただきました。あまり形式的になりすぎず、一番自然に行うことができる形は驚くほどの効果を生みました。しかし、形だけショート・ミーティングを行おうと思っても、フェイド・アウトすることになってしまいます。この方法は、関係者の関心を高く保たないと成果につながらない可能性があります。そのためには、お一人やお二人の先生だけではなく、全体での雰囲気も重要となってくると言えるでしょう。

今回のこの成果は、教育の基本を再確認した感があります。児童への関心、保護者との連携、校内の連携などは、いじめや不適應などのさまざまな問題の解決へヒントを提供してくれるものでした。かかわられた先生方に感謝したいと思います。